

## 第163回千葉県森林審議会森林保全部会の開催結果（概要）

- 1 開催日時  
令和6年7月12日（金）  
午後1時30分から午後3時20分まで
- 2 開催場所  
千葉県森林会館5階 第1会議室
- 3 出席者  
【委員】  
青山定敬委員（部会長）、鎌田直人委員、高橋輝昌委員、橘隆一委員  
【職員】  
佐藤森林課長、木村林地対策室長 他
- 4 議題  
（1）審議事項  
議案1「林地開発許可案件」について
- 5 審議結果  
上記の議案1に係る第1号から第3号案件について審議がなされ、森林法第10条の2第2項各号に照らして妥当な計画であると判断された。

## 【主な意見】

### ○第1号案件[【新規】工場、事業場の設置（複合商業施設の設置）について]

委員：面積はそれほど大きくないが、起伏に富んでいる地形と見受けられる。地形を考慮して、残置森林と開発区域との間の造成森林のところに土砂流出防止柵を設けるとのことか。

事務局：（土砂が）流出する恐れがあるので、仮設の土砂流出防止柵を設置する計画となっている。

委員：既設の水路までの間は構造物をつくらないのか。谷になっている所に集水するようであれば、水路があってもよいかと思うが。

事務局：水が集まりやすい地形になっているが、雨の翌日に現地を確認したところ、この部分に水は溜まっていなかった。周りの残置森林部分は、既設の水路に流れているので、開発によって、ここに集まる水の量は減ると考えている。

委員：図面の下方に雨水貯留槽をつくるとのことだが、雨水貯留槽に溜まったものはどこに流れるのか。

事務局：既設の水路に繋がって流れる計画となっている。

委員：樹脂製貯留槽ブロック製品を使う計画だが、空隙率は最大でも96%くらいが限界だと思うため、設計としてはギリギリで、余裕がないように感じる。空隙率95%を使った設計貯留容量が、①～⑨の雨水貯留槽ごとに計算されているが、必要容量を満たしているか。

事務局：必要容量3,854.53 m<sup>3</sup>に対し、設計容量3,892.07 m<sup>3</sup>を確保している。

委員：空隙率を95%で計算しているが、製品によっては94%のものもあるので、安全を満たすためには90～93%で計算すると思った。95%の製品を使うということで計算したということか。メーカーによっては、段数が増えると強度を増すために下の空隙率が94%に減るものもあるが、そういうことは無いということか。

事務局：はい。

### ○第2号案件[【変更】土石等の採掘（砂利採取及び埋蔵文化財調査）について]

委員：雨水は、全く外部に流出しない計画か。

事務局：内向きの法面が大半を占めており、事業区域の北側に一部、フラットに均される部分があるが、小堰堤を設け、雨水は事業区域外に流出しない計画となっている。

委員：拡大部分の雨水の大半は、浸透池2へ流れる計画に見えるが、変更計画を見ると浸透池1、2の両方とも規模を拡大している。どのような根拠で計算しているのか。

事務局：浸透池1側の区域はほぼ変わらないが、事業区域外で水が入ってきそうな部分があったので、そちらを含めて浸透池1の容量を再計算した結果、容量が大きくなっている。

委員：埋蔵文化財の調査を行ったあとも、浸透池の大きさは変わらないのか。

事務局：流出係数は、残置森林部分を含めて、裸地として計算されているので、余裕をもった容量となっている。拡大された都度、確認していき、必要な場

所に浸透池を設けるよう指導していく。

委員：今回、採掘が行われる法面が、埋蔵文化財の調査地にあたる部分に拡大されていくのか。

事務局：はい。

委員：浸透池の必要容量を計算する際に 30 年確率降雨強度で計算しているとの説明だったが、時々、50 年や 100 年確率に相当するような降雨が頻繁に起きているが、実際にこの計算で安全なのか。線状降水帯などが発生した場合はオーバーフローする可能性もあるのか。

事務局：今回の現場に限って言えば、30 年確率の降雨強度で、なおかつ、全体を施工中の裸地状態の流出係数で計算されている。さらに飽和透水係数も浸透しない側でより安全に計算されているため、事業区域外に流出する可能性は低いと考えられる。

委員：確率降雨強度については、何年かに一度見直しをしているのか。また、最新の基準は何年に見直しをしたものか。

事務局：令和 4 年度に見直し、令和 5 年度に施行された基準を使っている。林地開発許可制度では 30 年確率降雨強度で、令和 4 年度に追加された基準では必要があれば 50 年確率降雨強度としている。そもそもの確率降雨強度がどれくらいかというのは、河川整備の部局がとりまとめており、最新版で出されているのは平成 18 年のものであり、最近の極端な雨に対応した年確率降雨強度は、示されていない。

委員：確率降雨強度が 30 年から 50 年になると、どのくらい必要容量が増えるのか。

事務局：容量ではなく降雨強度で比較すると、県内 7 地区で降雨強度が示されているが、1.05 から 1.2 倍くらいの違いになっている。単純に考えると調節池等もそのくらいの比率で変わると考えられる。

委員：先ほど固く浸透しづらい地盤だと聞いたが、水が外に逃げずに溜まって、湿地のような状態になると思われるが、新たに植える木々は問題なく成長できるのか。

事務局：生育の基盤として表土を戻し、上層 60cm、下層 40cm の 1 m を確保して植栽する計画のため、実際の生育に関しては問題ないと考えられる。樹種に関しては、最終的にアカマツを生育する計画で、肥料木でヤマハギ、主林木の一つとして広葉樹のコナラも落葉して土壌形成するものとして入れられている。

委員：これまでの森林保全部会で、なぜアカマツを使わないのかと伺った時に、苗木が手に入りにくいという説明があったと記憶しているが、そのあたりは大丈夫なのか。

事務局：今回の事業者から苗木が手に入りにくいとは聞いていない。

委員：一般的にマツ材線虫病の関係で抵抗性マツを使う必要があると思うが、クロマツは海岸林の関係で需要があるので、クロマツの抵抗性マツの生産は全国的に盛んに行われているが、アカマツは大丈夫なのか。事業者が商売にならないため、あまり生産されていないような気がする。

事務局：手に入らなければ、変更の手続により、抵抗性のあるクロマツに変えるなど、実情に合わせた計画変更も考えられる。

### ○第3号案件[【変更】土石等の採掘（砂利採取）について]

委員：事業区域周辺の残置森林の幅を広く取っている感じがするが、どうか。

事務局：地番の一部という区域の取り方ではなく、地番ごと区域取りされている関係で、残置森林がかなり広がっている。今後の拡大予定については聞いていない。

委員：この図面の右端のところに、太陽光発電のパネルが設置されているが、そちらに対しての水の流出対策はどうか。

事務局：この部分（図示）に、小堰堤を設置する計画で、残置森林側に水が流出しないよう対策されているため、太陽光発電施設には、水が行かないようになっている。